

01/02年における論理学についてのヘーゲルの講義と思惟と存在との同一性の見地

——トロックスラーのノートから見て

Hegels Vorlesung über Logik von 180/02 und der Standpunkt der
Identität von Denken und Sein

—— nach der Troxlers Nachschrift

太 田 信 二
Shinji Ohta

はじめに

ヘーゲルが、大学での教員として初めて講義を行ったのは、1801/02年冬学期のイエーナ大学においてであった。ヘーゲルの年少の友人であり、また一時期共通の哲学的基盤に立っていたシェリングがすでにそこで教鞭を執っており、そのシェリングの尽力もあって、かなりあわただしい日程のなかでヘーゲルの講師活動はスタートを切るのであるが、その際開講を予告した講義は、「哲学入門」と「論理学・形而上学講義」と題されたものであった。

この二つの講義については、長らく消失したものと考えられていたヘーゲル自身の手になる講義草稿の一部分が発見され、1998年に出された全集第5巻にともに収録されている⁽¹⁾。くわえて、後者にかんしては、I. P. V. トロックスラーという講義に出席していた学生が筆記し、講義後まとめたノートが存在しており、シェリングの授業を受講した際の講義ノートとあわせて、K. デュージングによって編集・出版されている⁽²⁾⁽³⁾。

この「論理学・形而上学講義」自体にかんしては、主としてヘーゲル自身の講義草稿にもとづいて、すでに私見を述べたが⁽⁴⁾、今回は、その際に参照しつつも紙数の関係もあり、詳しくは論究できなかった上記のトロックスラーの「ノート」を主題的に取り上げてみたい。

ところで、この講義で展開されている論理学構想それ自体にかんしては、なによりもヘーゲル自身による「草稿」があり、また関係した言明が含まれている「哲学入門」の講義草稿もあり、くわえて、きわめて時間的に近接した状態で書かれたヘーゲル自身のまとめた著作である『差異論文』のなかでも、論理学の構想に関連した事柄はかなり詳しく展開されているといった状況がある⁽⁵⁾。他方、今回直接取り上げようとしている「ノート」が、「草稿」にもとづいた授業のノートである以上、当然のことながら「ノート」自体からヘーゲルの当時の論理学思想そのものについて、とりわけて新規の情報が多々えられるわけではない。むしろ、この「ノート」には、まさにノート故の不十分さも当然のことながら存在していること、さらに、たんにノート自体が一般にもつ制約にとどまらず、以下で若干触れるような弱点を

もっていることも事実ではある。

しかし、この「ノート」は、いわば講義だからこそ、さらには後述するような私的講義といってもいいであろう特殊な状況もおそらく反映して、当時のヘーゲルの論理学構想の背景をなしている考えが明確な形で、さらにいえば本音の部分がそのまま外部に現れ出ているという形で示されているという特徴を持っていると思われるのである。本稿が「ノート」をあえてそれ自体として取り上げる理由は、表舞台では必ずしも明示的な形では示されないこうした論理学構想の背景を「ノート」を通して明らかにすることができると思われるからなのである。

さらに、こうした特徴を明らかにするというということは、ときとしてヘーゲルの講義にかんして指摘される否定的な評価⁽⁶⁾にもかかわらず、学生の理解を促そうとするいわばヘーゲルの教育的配慮という、ヘーゲルがもっていた一側面を示すという意味あいももっているであろう。この点も、意識しつつ以下進めていきたい。

1 「ノート」における論理学

1-1 「ノート」と背景的問題意識

まず、この「論理学・形而上学講義」および「ノート」について、いくつか特徴的なことを確認しておこう。

前掲拙稿でも簡単に触れたように、イエーナ大学で実際に講師資格を取得するさいばかりではなく、博士論文の審査にまつわる一連の手続きも、きわめてあわただしいなかで行われたのであるが⁽⁷⁾、この「論理学・形而上学講義」もまた、当初11名の学生が講義の聴講を登録していたが、講義が進んでいくなかで、多くの学生が聴講を取りやめたために、正式の講義としては中断せざるをえなくなり、替わって2名の学生を対象としたいわば〈私的講義〉となったのである⁽⁸⁾。そして、この〈私的講義〉にも出席し続けた2名のうちの一人が、今回検討しようとするノートの筆記者であるトロックスラーなのである⁽⁹⁾。

こうした講義の実情を反映して、「ノート」自体にもいろいろと問題点が存在している。たとえば、「ノート」だけからは、どこからが〈私的講義〉になったのかは知りえないし⁽¹⁰⁾、話のつながりが必ずしもじっくりいっていない箇所が少なからず存在してもいるのである。その点にかんしては、授業の展開そのものがそもそもそのようなものであったのかもしれないし、あるいはデュージングが推測しているように⁽¹¹⁾、欠席したためにトロックスラーが誤解したのかもしれないといったようにさまざまな解釈が可能ではあろうが、いずれにしても、一貫性という点でこの「ノート」が問題を孕んでいることはたしかである⁽¹²⁾。

また、「草稿」等からすれば当然存在すべきもので欠けている部分もあるのである。たとえ

ば、論理学の講義ということから当然あると思われ、そしてまたたしかに「草稿」では、第二部に位置づけられていた(Vgl. GW 5, S. 273)、概念—判断—推理論が一切登場していないといったようにである。あるいは、「有限な認識の理性による止揚が示される」第三部で検討されるとされていた「推理の思弁的意義」(GW 5, S. 273 f.)ということばも「ノート」には登場していないし、また、そもそもこのきわめて興味深い論点が必ずしも明確にそれとして、あるいはこのことばのもとに予想されるような意味での思弁的な内実を持った形では展開されてはいないということ、くわえて第三部自体もそれとしては明確には言及されていないということの問題にすることも可能であろう。同じく、この時期のヘーゲルにとって——どのように解釈するのかを含めて——方法論上決定的な「直観」概念も「ノート」では論究されていないということも問題点として挙げることができよう⁽¹³⁾。

くわえて、対象とするものが「ノート」であり、しかもその「ノート」が講義の聴講生がまとめたものであるという性格からすれば、細部の表現にこだわることも生産的ではないであろう。たとえば「ノート」の最後の箇所「超越論的論理学の終わり」(Trox. 77)と記されているが、この表現が、ここで登場することにかんしては事柄からいって疑義が生ぜざるをえないのであるが、それ以上に、それがヘーゲル自身のいい間違いによるものなのか、あるいはなんらかの流れのなかで意図的に出てきたものなのか、あるいは「ノート」をまとめる際のトロックスラーの誤解によるものなのかどうかを詮索するといったようなことは、資料的な裏づけが期待できない以上、不毛な議論ということになるであろう⁽¹⁴⁾。

さらに、論理学で展開されるカテゴリーの実際の提示といった点を除けば、本稿の「はじめに」で触れたように、この「ノート」から、論理学に関連してなんらか新規なことをえようとしても多くのことは望めないといえよう⁽¹⁵⁾。

このように、この「ノート」が諸々の制約をもっていることはたしかではある。しかし、それにもかかわらず、この「ノート」それ自体も、十分興味深い内容を提示しているということができると思われるのである。

なりよりもここで注目したいのは、思惟と存在、主観と客観との区別と同一性をめぐった一連の言明なのである。たとえば、論理学の本論といってよい部分のはじめでは、「意識において対立しているものの一つは、客観であり、それをわれわれはマテリア (Materie)のうちに直観するのである。マテリアは、同一性と非同一性として定立されているのである」(Trox. 63) ⁽¹⁶⁾とされ、さらに、いわゆる客観的論理学における諸カテゴリーの提示と説明がなされる直前では、「さて、ヘーゲルは、同一性と非同一性——存在と認識との考察に進む」(Trox. 67) とされているというようにである。しかも、こうした思惟と存在、主観と客観との区別と同一性をめぐった発言は、たまたま講義の途中で、なんらか偶然に発せられたも

のではなく、後に具体的に確認するように、むしろ論理学の展開の要所要所でなされているのである。

われわれは、ここで、思惟と存在、主観と客観の区別と同一性の立場の確立が、この時期のヘーゲルが解決すべき最大の課題だったということを想起すべきであろう⁽¹⁷⁾。そうすれば、先のような言明は、論理学の構想、構造を考える際に背景にあったこの時期の課題が、同時に論理学の展開の《骨格》《骨組み》をも形成するものとして、しかもたんに背後で貫かれていくというだけではなく、直接的に、文字通り目に見える形で現れ出たものというように考えることができるのではないであろうか。とすれば、いわゆる体系期のヘーゲルの論理学観、すなわち同時に存在論でもあり、認識過程論でもある論理学というとらえ方が、この最初の論理学の講義においても、明瞭に見て取れるのではないであろうか。

「はじめに」で述べた本稿の目的を少し具体的な形で明記すればこのようにいうことができる。

ただ、この問題に入る前に、思惟と存在との関係にかかわる文言が、展開の要所要所に登場するという先の指摘からしても、まずは、「ノート」自体の全体的構造を、そしてそれにもとづいてさらに論理学の構造を明らかにしておく必要がある。

1-2 「ノート」の基本構造と論理学の構造

デュージングが編集したA5版相当の本で数えれば、14ページと数行からなっているこの「ノート」は、「論理学」と「形而上学」への「ノート」冒頭部分での二分割に応じた形で、「論理学」にかかわる部分と「形而上学」にかかわる部分の、大きくは二つの部分からなっている。そのうち、「形而上学」を扱った部分と思われるものが、約5ページ⁽¹⁸⁾、「論理学」に当てられている部分が残りの残りとなっており、また、形而上学の部分の直前で、欄外に「要約」(Rekapitulation)と記された部分が約2ページに渡って存在している。この部分をどのように理解するのかは議論の余地があるが⁽¹⁹⁾、少なくともそれ以前の論理学のいわば本体としての〈カテゴリー論〉の部分とは異質の展開がなされており、実際に書かれている事柄からも、〈要約〉——当然論理学全体を念頭に置いた要約ということになるだろう——というノート欄外のトロックスラーによる書き込みにしたがって理解しておいていいであろう。したがって、冒頭部分から「要約」と書かれている箇所を含めた7ページが純粋に論理学の部分ということになるわけである。

さて、このように講義全体が、大きくは論理学と形而上学とからなるとされていることにかんしては、講義自体が「論理学と形而上学」と題されている以上、ある意味当然であるといってもいいであろうし、また、この講義そのもののヘーゲル自身による「草稿」および「掲

示」においても基本的には確認できることではある。

もっとも、「有限性（悟性）の形式の破壊の学ないし無限なものの学である」（Trox. 63）と規定されている形而上学については、後にも簡単に触れる哲学史を踏まえた展開に続く「靈魂、世界、神」を対象とした実際の形而上学の部分において、「無限なものの学」としての形而上学について自説を積極的な形で述べるのではなく、むしろ反省の立場にとどまる旧来の形而上学における上記の対象についての理解にたいする批判が主たる内容となっているという問題点を指摘することもできよう。ただ、「ノート」における論理学の展開構造と背景的問題意識との関係にかかわる諸問題を明らかにしようとする本稿の主題からいって、形而上学にかかわる問題については、こうした問題が存在しているということを指摘するだけにし、先に進むことにしよう。

論理学に関連した話題に戻れば、「論理学」と題された冒頭部分から、「要約」と欄外に記された部分の手前までが「論理学」の実際の展開部分ということになるわけであるが、まず確認しておきたいのは、既述のように、後の『大論理学』のことばづかいでいえば、「主観的論理学」と呼びうる部分、さらに限定していえば概念—判断—推理論からなるいわゆる思惟形式論は、「ノート」には存在していないということである。

もっとも、「草稿」によれば「有限性の主観的諸形式」（GW 5, S. 273）を取り扱う箇所として「論理学」の第二部をなすとされる前者が「ノート」では言及されていないということにかんしては、デュージングがいうように⁽²⁰⁾、伝統的な形式論理学の叙述自体にはあまり重要性を認めなかったが故にであるというように考えることもできよう。いずれにしても、「要約」部分を除いた論理学本体について、ここでは「論理学」の構成契機として、いわゆる存在論的なカテゴリー論と並んで概念—判断—推理論が存在していたということ、そして、かりにその部分にかんする叙述が「ノート」のなかに存在していたとしても、その点に関連した叙述ということでは、特別な指摘はおそらくはなされなかったであろうということ——もし、この部分でなんらか特別の展開をヘーゲルが考えていたとしたら、少なくともそれを示唆するような文言が存在していたはずなのである⁽²¹⁾——が確認できれば当面は十分であろう⁽²²⁾。

では、論理学それ自体はどのような形で展開されているのであろうか。先に提起した論点の骨子を再確認しておこう。まず、第一に「ノート」の論理学部分を読んだときに気づくのが、思惟と存在、主観と客観の区別と同一性にかかわる指摘が登場していること、そして、それはけっしてたまたま登場するといったものではなく、あるいは、思いつきの、何力所かで言及されるといったものでもなく、いわば要所要所に登場してきているように見えるということ、さらに、そうした理解は、思惟と存在との区別と同一性という観点がこの時期の

ヘーゲルにとって、もっとも肝要な観点であったとしたら、いわば当然のことだと考えられること、論理学について指摘したことの骨子は、おおよそこのようにまとめることができるであろう。

では、実際に、思惟と存在、主観と客観の区別と同一性というこの視点を柱に据えた場合、「ノート」の展開はどのような姿を見せるのであろうか。その姿をまずは浮かび上がらせるために、分析を一部保留しつつ、《骨格》を明らかにして見よう。

まず、ヘーゲルは、論理学の学的性格を悟性の学と位置づけ、さらに論理学の方法論的特徴について手短かに触れた上で⁽²³⁾、まさに上で《骨格》とした思惟と存在、主観と客観との区別と同一性にかかわって「意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリアのうちに直観するのである。マテリアは、同一性と非同一性として定立されているのである」(Trox. 64) とするのである。この後、後に少し詳しく考察する必要がある点や面、さらに力学的運動や天体の運動等々にまで及ぶマテリアをめぐる一連の発言——上で一部保留しつつと書いたのは、この部分を指しているのであるが——を、4ページ弱に渡ってした上で、ふたたび《骨格》がらみの「さて、ヘーゲルは、同一性と非同一性——存在と認識——との考察に進む」(Trox. 67) という記述があり、その直後から、いわゆる客観的論理学における諸カテゴリーの提示と説明がなされるのである。

この後、先の論理学全体の構造を確認した際に触れた「要約」が続くのであるが、この「要約」のなかも、また当面の関心からいえばきわめて重要な形で展開されている。すなわち、ヘーゲルは「要約」部分で、まず「反省は、おのおの規定されたもので、二つの対立したものを定立し、そしてそれからふたたびそれらを総合しようと試みる」(Trox. 70) とした上で、「反省」つまりは悟性の特徴づけを、理性ともかかわらせつつ「有限性あるいは反省の諸形式の考察において、われわれはその最高度の抽象として二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我を考察しなければならない。そこに至るまでは、われわれはマテリアを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」(Trox. 70) という形で述べているのである。

「要約」の冒頭での「反省は、おのおの規定されたもので……」という発言および今引用した箇所「有限性あるいは反省の諸形式……」という発言が、ともに先に指摘した論理学冒頭部での論理学の学的性格づけに対応したものであることは容易に見て取れよう。さらに《骨格》にかかわった「最高度の抽象として二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我を考察しなければならない」という発言は、「そこに至るまでは」という文言からすれば、まさに有限性の学としての論理学が最終的に目指す目標を明示したものであることができるであろうし、「そこに至るまでは」に続く部分によって、その目標に到達する道程と《骨格》を踏

まえた形で「同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」とされるマテリーとが関連づけられているのである。

さらに「要約」の後半部で、ヘーゲルは同一性と非同一性という規定が、いわば方法論上の核をなしている旨の発言をした上で、後述する〈四角形〉をめぐった議論を展開しているのであるが、ここでもまた実質的には、〈四角形〉は、主—客の区別と同一性からなる「客観的トタリテートにおける絶対者」と規定される「全体 (das Ganze)」だとされているのである (Trox. 71)。

さらに、「形而上学」にかんする講義が開始される箇所の冒頭でも、ロック、ライプニッツ、カント、フィヒテ、シェリングに言及しつつ「個別的なもののすべてのあの規定は、主観的なものが客観的なものに対立しているということから出発する。これらがたがいにいかなる関係にあるのかという問いが、これまでの哲学の問題であった。」(Trox. 72) とされているが、ここもまた一部わかりにくい表現が含まれているものの、発言の趣旨としては、哲学全体とりわけ近世哲学の流れが主客の関係という観点からとらえられており、論理学の《骨格》としてきたものと同趣旨の言明であるということができようであろう。くわえて、近世哲学をこうした主客の区別と同一性という観点からとらえる見地は、上の「その最高度の抽象として」の「自我と非我」に言及している引用とも関連して、のちのいわゆる『哲学史講義』でも明確に堅持されているものでもあるのである⁽²⁴⁾。

見られるように、方法論的特徴づけに続く「意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリーのうちに直観するのである。マテリーは、同一性と非同一性として定立されているのである」(Trox. 64) に始まり、形而上学の部分と思われるものまで含めれば、「個別的なもののすべてのあの規定は、主観的なものが客観的なものに対立しているということから出発する。これらがたがいにいかなる関係にあるのかという問いが、これまでの哲学の問題であった」(Trox. 72) に至るまで、一貫して思惟と存在、主観と客観との区別と同一性という観点が、展開の《骨格》をなしていることは明らかであるといってい

いいであろう。

では、先に「保留しつつ」とした部分、つまり方法論的な特徴づけと実際のカテゴリー論との間に挟まれた部分は、こうした流れのなかでどのように理解しうるであろうか。次にこの問題を考えることにしよう。

2 論理学の展開の統一性

2-1 統一性とマテリーの問題

保留部分の理解にかんして、まずもって確認しておかなければならないのは、今まで論じ

てきたように、この「ノート」での議論の筋道が、《骨格》にもとづいてみたとき、少なくとも大枠においては十分配慮されたものとなっており、したがってまたその論理展開にかんしても、それなりの首尾一貫性をもっていると思われるという点である。われわれは、今取り上げている部分をどのように理解するのかという点にかんしても、こうした「ノート」の基本的性格を踏まえて考える必要があると思われるのである。

逆に、こうした観点にもとづいて読まないかぎり、今問題にしようとしている箇所に出てくる、先にも触れた「点」や「面」あるいは「運動」といった論点は、たとえばデュージングがそうであるように、この「ノート」では、論理的カテゴリー群に、反省的手法にもとづいた数学や自然科学の根本概念もつけ加えられているという指摘で、あるいは自然哲学的なテーマも論じられているといったいいかたで済まされてしまうのである⁽²⁵⁾。もし、こうした理解を前提に読めば、そしてそれはそれなりに興味深い論点を提示しているということはいえるのであろうが⁽²⁶⁾、論理学のうちのこの部分は、いわば独立した、あるいはせいぜい「この時期のヘーゲルは〈点〉について以下のように理解している」といった形での意味しか持たないということになろう。しかも、全体としては14ページの「ノート」のうち、4ページ弱が割かれているということも相まって、この部分はこの部分として独立した、したがって当然「ノート」の他の部分とはかかわりのない、自然哲学的考察であるとする理解をいっそう強固なものにするかもしれないといえよう。

しかし、上で指摘したように「ノート」がそれなりに一貫性をもっているのであるということから出発した場合はどうであろうか。

今、問題にしている部分を削除したらどのような展開になっているのか、場所だけは明示するために、この箇所を《省略部分》と記す以外にはなにも手を加えず、「ノート」の冒頭からカテゴリー論に至るまでの叙述を実際に見てみよう。

=====

1. シェリングにしたがった哲学の規定

- a. 論理学は有限性(悟性)の諸形式についての学である。
- b. 形而上学は、有限性の諸形式の破壊(Zerstörung)の学あるいは無限なるものの学である。

2. シェリングにしたがった絶対者の理念。

フィヒテの自我性との比較

論理学

悟性はたんに対立のみを見ており、制約されている。悟性は、絶対者を同一性において模倣(nachahmen)しようと努め、そしてもろもろの矛盾のなかに巻き込まれる。すべての哲学の端初は同一性の破壊である。

同一性は、——悟性は、そのように定めるのであるが——対立の否定、排斥に過ぎないが、しかしこの〔悟性の〕試みは、つねに失敗するのであり、したがって同一性はけっして同一性ではないのである。

論理学は、二つの部分、つまり分析的な部分と総合的な部分に分かれる——そこにいまやまたなお第三の部分つまり弁証法的な部分がくわる。

意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリーのうちに直観するのである。マテリーは、同一性と非同一性として定立されているのである。

《省略部分》

さて、ヘーゲルは同一性と非同一性——存在と認識——の考察に進む。

われわれにとってはただ対立の否定を通してのみ成立する純粋有（存在であって、絶対者ではない）は、……。

=====

どうであろうか。もちろん、後の論理学の観点からすれば、悟性ないし反省と、ここではことばとしては直接は出てきてはいないが、当然想定されている理性との関係や論理学の役割ないしは論理学と形而上学との関係等にかんして、不明瞭な、ないしは消化不良ともいえる箇所も見られる。また、最初の方で登場する「シェリングにしたがった云々」といった表現も、デュージングがいうように無名の哲学者であるヘーゲルからすれば、聴講生にたいする自己紹介的な内容であるといえるかもしれないが⁽²⁷⁾、事柄からすれば不必要なものといえることができるであろう。

しかし、整備が必要であると思われるこうした点がいくつかあるにもかかわらず、全体としてみたときには、それなりにもっともな展開がなされているといえることができるであろう。つまり、まずは論理学の役割が形而上学の役割との対比において述べられ、そこから論理学全体の〈有限者の学〉という形での特徴づけがなされ、さらに論理学の方法論的な特徴が述べられるといった展開がなされた上で、「マテリー」概念が導入され、そして次に論理学の実際の展開、すなわち〈純粋有〉から始まるカテゴリー詳論へと進んでいるのである。

しかも、ここでもまた、思惟と存在との区別と同一性という観点が、マテリア概念が登場してくる直前の「意識において対立しているものの一つは客観であり、……」とカテゴリー展開が始まる冒頭の「さて、ヘーゲルは同一性と非同一性——存在と認識——の考察に進む」という文言となって、いわば展開の要として登場してきているのである。

このように、省略箇所を除けば、展開がきわめてスムーズになされているのだとすれば、この省略箇所だけに異質なものの、つまり自然哲学的なテーマのそのものとしての展開が紛れ込んだとは考えにくいのではないであろうか。むしろ、省略箇所を含めてそれなりに一貫した展開にもとづいた読み方が可能なのではないであろうかという視点から見直してみる必要があるのではないであろうか。

この点から強調したいのは、ヘーゲルがマテリアを大きくは二つの視点から取り上げているということなのである。一つは、当然今問題にしている部分、すなわちマテリア概念が導入されてから、「さて、ヘーゲルは……」という記述が出てくるまでの箇所に関連した視点であり、もうひとつは、それ以降の部分、つまり実際のカテゴリー展開にかかわる視点、それはまたマテリアを論理学を実質的に貫通するものとしてとらえることにつながる視点ということになるだろう、であるといえよう。

このように、二重の視点からマテリアをとらえているという理解が正当なものであるとすれば、当然最初の視点に支えられて後者の視点が出てくるという関係にあることになるだろうが、この両者の関係については、それぞれの視点から見えてくるマテリアの特徴を明らかにした上で、立ち返ることにしよう。

2-2 論理学貫通的なものとしてのマテリア

まず、後者の視点、すなわちカテゴリー展開にかかわる視点から考えていくことにしよう。こうした視点からマテリア概念を考えていく際になによりも考慮に入れなければならないのは、以下の言明から知られるように、それがいわば論理学貫通的性格を持っているということであり、したがってまた、そこにおいて論理学の展開がなされる《場》ないしヘーゲルの意味における《エレメント》をなすものとして、マテリアは現れてくるということである。

先に論理学全体の要約部分にあたるとした箇所でのヘーゲルの指摘を見てみよう。若干長くなるが、この引用が登場してくる箇所の意味あいもわかるように全体を引用しておこう。

「反省は、おのおの規定されたもので、二つの対立したものを定立し、そしてそれからふたたびそれらを総合しようと試みる。そのことによって反省は理性の努力を表現しているが、反省は対立および総合の無であること(Nichtigkeit)を承認しないがゆえに、ただ矛盾に陥るだけである。唯一理性のみが絶対的に同一なものを確立することによって、矛盾を解決す

ることができるのである。有限性あるいは反省の諸形式の考察において、われわれはその最高度の抽象として二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我を考察しなければならない。そこに至るまでは、われわれはマテリーを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」(Trox. 70)。

この引用のうち、冒頭の「反省は」から「唯一理性のみが絶対的に同一なものを確立することによって、矛盾を解決することができるのである」までの文章は、有限性の学としての論理学と無限性の学としての形而上学とを対比したものであることは明らかであろう。そして、それに続く文章にしたがえば、論理学を総括する役割を担うのが「自我と非我」の関係の考察すなわち総括的な形での思惟と存在との区別と同一性をめぐった関係の考察であり、今やその解明が行われる場所に至っているというわけである。

したがって、「そこに至るまでは、われわれはマテリーを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」といわれていること、および論理学の冒頭部での「意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリーのうちに直観するのである。マテリーは、同一性と非同一性として定立されているのである」(Trox. 63)とされていたことを考えあわせれば、マテリーとは、まずは論理学を貫通するものであり、それにもとづいて論理学の展開が行われる《場》、《エレメント》であるということが、したがって当然カテゴリーがそこにおいて展開される《エレメント》ともなっているということがいえるであろう。

くわえて、今のヘーゲルの指摘にもとづけば、この論理学貫通的マテリーは、もうひとつの意味も持っていることも明らかであろう。論理学貫通的なものとして論理学の《エレメント》をなすマテリーは、同時に「意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリーのうちに直観するのである」とされていることからすれば、存在の諸規定を体系的に展開する論理学がそれをめぐって展開される論理学の対象としても理解できるであろうからである。いいかえれば、マテリーは、意識、主観の対をなす客観、存在を、総体として視野に入れた規定としても位置づけられているのである。たとえば、上の「最高度の抽象」としての「自我と非我」という指摘に見られるように、ヘーゲルは主観と客観、思惟と存在を最広義の概念としてとらえているのであるが、一方の主観から独立し、主観によって対象としてとらえられる側である客観が、まずはマテリーとしてカテゴライズされているといってもいいであろう。

しかし、マテリーが、このように論理学の対象として客観と規定されたからといって、それはたんに主観に一面的に、あるいはヘーゲルのことばづかいをすれば、悟性的に、対立した客観ではない。というのも、たしかにヘーゲルは「意識において対立しているものの一つ

は客観である」としているが、ただちに「マテリアーは、同一性と非同一性として定立されている」とつけくわえているからである。同じように、ヘーゲルは、論理学の総括部分でも「われわれはマテリアーを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」としていることについては、すでにわれわれが見たとおりである。

では、どうしてマテリアーは「意識において対立しているものの一つ」としての「客観」であると同時に「同一性と非同一性との無差別」でもありうるのであろうか。ここに、たんなる反省哲学とは区別される思弁の哲学としての、あるいはたんなる悟性の立場に立つ哲学とは異なった理性の立場に立つヘーゲルの哲学の特色があるのである。

この点にかんしては、ヘーゲルが「草稿」で論理学の対象、厳密にはいわゆる客観的論理学の対象ということになるが、について「有限性の一般的諸形式あるいは諸法則を、客観的観点ならびに主観的観点において……叙述する」(GW 5, S. 273)としていたことを想起すればいいであろう。つまり、論理学の諸規定は、まさに思惟の諸形式・諸規定である以上、思惟諸規定であり、主観的なものなのである。しかし、それはたんに主観的なものにすぎないのではなく、同時に、客観の諸規定として、客観的なものでもあるのである。『小論理学』の周知の表現を使えば、論理学はまさに「思惟において把握された事物の学」⁽²⁸⁾なのである。

あわせて、総括的に自我と非我が対置されるに至るまではマテリアーが同一性と非同一性を表すものとされていることについても考えておこう。この場合には、明らかに区別と同一性との同一性ないし無差別という視点が、過程性とのかかわりのなかで問題にされているということができよう。というのも、上記のように、論理学が思惟諸規定を論ずるものであるとすれば、そして思惟諸規定がまさに存在を規定するための諸規定であるとすれば、あるいは思惟諸規定が存在を思惟するための規定であり、したがってまた存在の諸規定であるかぎり、論理学が対象としているのは存在なのであり、その存在をどのような局面から、どれほど深くとらえているのかが、論理学の体系的展開に際して問題になるのであるとすれば、いわゆる思惟諸規定・論理的諸規定は、思惟の対象である存在との区別と同一性という観点から展開されるべきなのである。そして、まさにそうした区別と同一性が問題になる局面で、思惟の対象となるべきものがマテリアーと呼ばれているわけである。

2-3 《マテリアー論》と《カテゴリー論》

以上、カテゴリーの展開部分における論理学貫通的なものという視点からマテリアーを考察してきたが、マテリアーは、カテゴリー展開へと進んでいく直前、すなわち、まずは論理学を有限性の学と規定し、さらに論理学の方法論的特質について明らかにした後で、「意識において対立しているものの一つは客観であり、それをわれわれはマテリアーのうちに直観するので

ある。マテリアーは同一性と非同一性として定立されているのである」(Trox. 63) という文言から始まり、「さて、ヘーゲルは同一性と非同一性——存在と認識——の考察に進む」(Trox. 67) という文言からカテゴリー論へと移っていくまでの部分でも、先に提起したようにもうひとつの視点から論じられているのである⁽²⁹⁾。

この視点がいかなるものなのかは、この部分に課されている課題が、そのおかれている位置から推測されるように、カテゴリー展開の《場》であり、《エレメント》であると同時に、また論理学の実質的な対象・内容でもあるマテリアーとはそもそもいかなるものなのかを、実際の展開に先立ってあらかじめ総体的に規定することにあるということを考えてみればよいであろう。

つまり、いわばマテリアー詳論としての実際のカテゴリー展開に移行するために、マテリアー概念を総体的視点からとらえること⁽³⁰⁾、それがこの部分でおこなわれるべきことだったといえよう。

では、論理学貫通的なマテリアーとそれに先だって論じられるマテリアー、かりに前者を《カテゴリー論》、後者を《マテリアー論》と呼ぶとすれば、《カテゴリー論》におけるマテリアーと《マテリアー論》におけるマテリアーという二つのマテリアーはどのように関係しているのだろうか。

この問いにたいしては、《カテゴリー論》として述べられる論理学貫通的マテリアーが、諸契機に即して具体的に考察される論理学の対象を全体として指す概念であり、最終的には「二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我」との同一性として総括されうる概念であるとするれば、《マテリアー論》のマテリアーは、存在、客観を総体として論究対象としたものであり、個々の契機へと細分化することなく、文字通り存在を総体として見たものであると答えることができよう。つまり、具体的な展開に先立って、論理学の冒頭に位置づけられている《マテリアー論》として論じられるマテリアーと論理学の具体的展開過程において《カテゴリー論》として論じられるマテリアーとは、対象を総体としてとらえたものと、同じく総体としての対象を過程性においてとらえたものという関係にあるのである。《マテリアー論》が、存在をいわば集約的に考察対象にするのであるとすれば、それに続く論理学の具体的展開過程は、そうした集約的考察対象を過程をなすものとして、いわば横に展開したものというようにも説明することができよう。

《マテリアー論》と《カテゴリー論》で論じられる二つのマテリアーの区別と同一性は、次のように考えることもできよう。すなわち、《マテリアー論》が存在、客観を総体としてみたときの論理学の対象の特徴の考察であるとするれば、《カテゴリー論》は、マテリアー、存在が、たとえば「どれほど」であるのか、本質的なものとしてあるのか、偶有的なものとしてあるのか、

原因として存在しているとはどういう存在の仕方なのか等々といった、存在をいわば一定の観点からとらえるときに必要になる規定を体系的に展開したものであるというようにである。あるいは、《マテリー論》とは、およそ存在が「どれほど」であろうと、あるいはまた「本質的なもの」であろうと「非本質的なもの」であろうと、そうした存在の特定のあり方には関係なく、存在がおよそ存在といわれるかぎり、したがって存在を個々の存在としてではなく、総体としてとらえたとき、そうした存在に共通に妥当する規定性を問題にしているのであるというようにいうこともできるであろう。およそ存在が存在であるという視点からとらえられた存在の規定性が《マテリー論》で取り上げられる規定性であるといってもいいであろう。それはちょうど、ヘーゲルが時間と空間を指して「有限性のすべての存在の様態 (Modi alles Seins der Endlichkeit)」(Trox. 65) つまりは有限な、現実存在するものすべての存在の仕方と規定しているのと同様であるといえよう。

では、《マテリー論》の実際の展開はどのようになっているのであろうか。この《マテリー論》についても、先に確認した分量的なアンバランスばかりではなく、全体では4ページ弱に渡る《マテリー論》の冒頭部から半ページほどは「(反省の) 問い：マテリーは創造されたのか、ただ形式を与えられた (geformt) だけなのか？」という問いの形式での叙述が4点続いた上で、「すべての有限性の存在の様態は時間と空間である」という指摘からは通常の叙述スタイルに戻っているというように、首尾一貫性ということに拘れば疑問点は容易に指摘できよう。

ただ、こうした叙述スタイルの相違という点にかんしても、あくまでそこで述べられている内容に注目すれば大きな問題とはならないであろう。そもそも、この冒頭部が「(反省の) 問い」という形式で始まっているのも、おそらくは「有限性 (悟性) の諸形式についての学」としての論理学とそこでの矛盾の提示およびより高次の学、すなわち「有限性の諸形式の破壊の学あるいは無限なるものの学」としての形而上学でのその克服という構想 (Trox. 63) が当初念頭にあってのことであると推測できようが、内容的には、「(反省の) 形式」という展開スタイルを取っていても、そこで述べられていることは後続のものと違和感なくつながっているのである。

この点を確認した上で、では、この反省の問いなるものがどのような問いからなっているのかを、それぞれ冒頭部で記されている問いのみを抜き出す形で見てみよう (Vgl. Trox. 64 f.)。

第一の問い：「マテリーは創造されたのか、ただ形式を与えられただけなのか？」

第二の問い：「マテリーと形式は一つであるのか？」

第三の問い：「マテリーは単一であるのか、多様であるのか？ すなわちマテリーは一つの

全体であるのか、あるいは諸部分〔から出来上がっているもの〕であるのか？」

第四の問い：「マテリアーは生きているのか、死んでいるのか？」

この四つの問いは、第一の問いであれば、総体として見たときの物質の恒存性をめぐった問いといえることができるであろうし、第二の問いは、物質とその形式との関係の問題といえることができるであろうし、第三の問いは、総体としての存在にかんした全体一部分をめぐる議論、そして最後の第四の問いであれば、物質の運動性をめぐる議論というように理解することが可能であろう。

ヘーゲルは、さらにこの《マテリアー論》冒頭での四つの問いに引き続いて、先に引用した「すべての有限性の存在の様態は時間と空間である」(Trox. 65) という文言、この文言こそ、この前後の箇所をまさに《マテリアー論》という形で括った拠り所となったものであるが、から、時間と空間というすべての存在の基本的な存在様式についてそれぞれ考察した上で、「時間が空間のうちに定立されると、それは運動である」(Trox. 66) という指摘にもとづいて、運動の問題に移っていくのである。この運動論は、運動一般から天体の運動や有機的な運動といった現実の力学的運動へと進んでいくのであるが、ここでもまた、論理学の冒頭部での総体としての存在の基本的な存在様式論として、はたしてどこまで論究すべきなのかについて疑問が生じようが、しかし、そうした問題を別にすれば、存在全体の基本的存在様式として〈時間—空間—運動〉が論じられることにかんしては、それなりに妥当なものといえることができる。

いずれにしても、内容的にはこのように理解することができるのだとすれば、上の四つの問いを含めて《マテリアー論》についての本稿の仮説、すなわち、総体としての存在にかんする基本的な特徴の提示となっているというように《マテリアー論》を読むことに問題はないのではないであろうか。

その後を受けて、ヘーゲルはいわゆる論理的カテゴリーの体系的展開へと移っていくのであるが、カテゴリーの体系的展開という形で存在の認識過程を展開するにあたって、当然、対象はいわば諸存在として区別されて認識の前に登場してくる必要があるだろう。そして、そのためには、まずもっては「区別の能力」としての悟性によって、存在が、諸存在からなる存在として「部分」へと分かたれるわけである。すなわち、悟性の規定作用によって、「客観的なものは諸規定性へと分かれるのである」(Trox. 67)。こうした諸規定性、すなわち、それによって客観的なものが区別され、多様な観点からとらえられるところの存在自身の規定であり、またそれによって存在の認識がなされる規定として思惟の規定でもある規定性が、カテゴリーだといえることができるであろう。

こうした特徴づけが妥当なものだとすると、われわれは、論理学の基本的構造についての

ヘーゲルの理解を次のようにまとめることができよう。すなわち、ヘーゲルは、論理学の実質的な展開を、まず「悟性はたんに対立のみを見ており、制約されている。悟性は、同一性においてある絶対者を模倣しようと努め」(Trox. 63)といった文言によって論理学の基本性格を《悟性の学》と特徴づけることからはじめ、次に論理学全体の方法論的構造を明らかにした上で、《マテリー論》という形で論理学の対象を総体として規定し、それにもとづいて、トロックスラーによって「ヘーゲルは同一性と非同一性——存在と認識——の考察に進む」(Trox. 67)と記されている箇所から実際にカテゴリー論の体系的展開を通した認識過程を論じようとしている、というようにである。その際、反省ないし悟性による「定立、反定立、関係」(Trox. 71)にしたがって⁽³¹⁾、あるいは同一性、非同一性および無差別を方法的概念として(Trox. 70 f.)、諸カテゴリーを、「量・質・関係(Relation)」、「実在性(Realität)・否定・制限(Limitation)」、「一(Einheit)・多(Vielheit)・全体(Allheit)」、「実体性・因果性・交互作用」といったカテゴリー群にまとめつつ、実際の展開はなされているが、本稿の目的からいって、今それぞれについて細かく言及する必要はないであろうが、いずれにしても、《マテリー論》に引き続く部分が、こうしたそれなりに単純なものから複雑なものへという認識過程に即した対象の認識のための思惟諸規定論が《カテゴリー論》であるということは確認できよう。

「ノート」では、この《カテゴリー論》に続いて、いわゆる主観的論理学ないし概念一判断一推理論についての言及なしに、ただちに「要約」と欄外に記された部分に移っているわけであるが、この「要約」が、論理学における《骨格》、《骨組み》である思惟と存在との区別と同一性をめぐる重要な指摘を含んでいることについては、折に触れて指摘してきたところである。そうした「要約」にふさわしく、その最後の部分で論じられるのが、二つの三角形からなる四角形なのである。「定立、反定立、関係(Beziehen)」を三つの頂点とする三角形とは、上のカテゴリー展開の在り様^{よう}を指したものであること、あるいは総括的には「有限性あるいは反省の諸形式の考察において、われわれはその最高度の抽象として二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我を考察しなければならない。そこに至るまでは、われわれはマテリーを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」(Trox. 70)と表現されていた、カテゴリー展開のなかでのマテリーのあり方を特徴づけたものに他ならないであろう。

もちろん、このカテゴリー展開のなかでのマテリーが示す三角形は、カテゴリーが主観の形式であり、思惟諸形式であるという反省の見地からすれば「主観的トタリテート」(Trox. 71)にすぎず、もうひとつの客観の側でのトタリテートをあらわす三角形と合して、四角形となることによって、「全体(Ganze)」としての「絶対者」をあらわすことができるのである。

この点についても、たしかに「定立、反定立、関係」という三角形の三つの頂点の存立構造や四角形をなすとする二つの三角形の統一あり方等々をめぐって、いわば消化不良的な展開に留まっているということではできよう。

ただ、全体としてみたとき、この「ノート」は、最初の明確な論理学構想としての「論理学・形而上学講義」におけるヘーゲルの問題意識を鮮明に浮かび上がらせているということは結論としていうことができるのではないであろうか。

註

※引用文中の傍点はすべて引用者によるものであり、さらに……は引用者による中略箇所、〔 〕は引用者による補充を示している。

(1) 以下「論理学・形而上学講義」の講義草稿は「草稿」と表記することにする。

(2) Ignaz Paul Vital Troxler, Hauptideen von Hegels Vorlesung über Logik und Metaphysik (1801-1802). In: Klaus Düsing (Hrsg.), Schellings und Hegels erste absolute Metaphysik (1801-02). Zusammenfassende Vorlesungsnachschriften von I. P. V. Troxler. Köln 1988. 以下、この著作からの引用(言及箇所の明示の場合も同様)は、たとえば、24ページからのものであれば、Trox. 24という形で示すことにする。また、以下では、「ノート」という表記で、トロックスラーによるこのノートを指すものとする。なお、多田茂氏によるこの「ノート」の邦訳が、寄川条路編訳『初期ヘーゲル哲学の軌跡 断片・講義・書評』ナカニシヤ出版、2006年に収録されている。

(3) デュージングによれば、スイス生まれのトロックスラーは、イエーナ大学で医学の学位を取り、また後にはバーゼル大学やベルン大学で哲学の教授になっている。Düsing, op. cit., (Einleitung) S. 14 f.

(4) 「01/02年におけるヘーゲルの論理学構想について——ヘーゲルの最初の講義草稿にもとづいて」『國學院短期大学紀要』第21巻、2004年。

(5) 拙稿「ヘーゲル『差異論文』における悟性と理性」(『國學院短期大学紀要』第15巻、1997年)で、『差異論文』における論理学に関連したヘーゲルの思想について、特に悟性と理性との関係に主眼をおいて論じたことがある。

(6) たとえば、ゲオルグ・ビーダーマン『ヘーゲル 伝記と学説』(尼寺義弘訳) 大月書店、1987年、55,56ページ参照。

(7) 前掲拙稿「01/02年におけるヘーゲルの論理学構想について」の135ページ(註4)で、一つの典型的事例として、教授資格請求論文の提出日時とヘーゲルによる試験講義の日時そして上述の二つの講義の開講予定日がきわめて接近していたことを指摘しておいた。

(8) Vgl. G. W. F. Hegel, Gesammelte Werke Bd. 5. Schriften und Entwürfe (1799-1808), hrsg. von Manfred Baum und Kurt Rainer Meist, Hamburg 1998, S. 659 (Editorischer Bericht). 以下全集のこの巻はGW 5とあらわすことにする。なお、受講登録をした11名の学生の名前については、Heinz Kimmerle (Hrsg.), Dokumente zu Hegels Jenaer Dozentätigkeit (1801-1807). In: Hegel Studien Bd. 4 1967, S. 59で知ることができる。また、こうした特殊の状況下での講義を〈私的講義〉と表記することにする。

(9) 上記全集の編者報告(Editorischer Bericht)によれば、もう一人の学生はフランクフルト出身のF.シュローサーである。Vgl. GW 5, S. 659. なお、デュージングによって引用されている手紙によればシュローサーはゲーテの甥である。Vgl. Düsing, op. cit., S. 13.

(10) どこから〈私的講義〉なのかについて、デュージングもノートからは明確にはいえないとしている。Vgl. Düsing, op. cit., S. 14.

- (11) Vgl. *ibid.*, S. 179 (Anm. 117).
- (12) 全集第5巻の編者は、この〈私的講義〉が通しで書かれている草稿にもとづいてなされたものではなく、メモ書きを利用してなされたものかもしれないと推測している。Vgl. GW 5, S. 660.
- (13) ただし、「感性的直観」という意味では「直観」概念は使われてはいる (Vgl. Trox. 71)。
- (14) なお、ヘーゲル自身の手書きによる学生向けの揭示 (以下この揭示に言及するときには「揭示」と表記する) では、「客観的悟性の理論」つまりいわゆるカテゴリー論の部分が「一般的論理学ないし超越論的論理学」 (GW. 5, S. 654) と呼ばれている。
- (15) なお、「形而上学」にかんしては、「草稿」では、ただ構成契機として形而上学が含まれていることは明記されているが、実際はどのような内容での展開が想定されていたのかにかんしてはなにも記載されていないのにたいして、「ノート」には、形而上学の内容にかんしてそれなりの記述は含まれているといった相違もある。
- (16) 多田氏は“Materie”を「質料」と訳しているが、本稿では、後述するようにMaterie概念が多様な意味を兼ね備えているものと理解しているので、あえてカタカナで表記するにとどめた。
- (17) たとえば、ホルストマンも、時代を《分裂の時代》として理解するイェナ期のヘーゲルにとって、もっとも基本的な分裂は主客の分裂であるとし、「ヘーゲルのイェナ時代のさまざまな体系構想は……主観と客観との対立を概念的に克服しようとするさまざまな試み」であるとしている。Rolf P. Horstmann, *Jenaer Systemkonzeptionen*. In: Hegel, hrsg. von Otto Pöggeler, Friburg/München 1977, S. 44 ff. 谷嶋 喬史郎 四郎 監訳『ヘーゲルの全体像』以文社、1988年、73～75ページ。なお、訳文は引用者自身によるものである。
- (18) 論理学の部分は「論理学」という見出しが記されているのにたいして、「形而上学」の部分にかんしては、特に出し示的なものは記されておらず、形而上学に関連したものと思われる部分の開始は推測によらなければならないが、一応話題の転換からすれば、デュージング編纂の本では72ページの4行目以降がそれにあたるものと思われる。なお、「ノート」を訳出した多田氏も、この箇所を形而上学の始まりと解し、「第五節 形而上学」と見出しを立てた上で訳出している。ただ、この箇所に続いてすぐ、ロックから始めた哲学史的な振り返りがなされている箇所があるが、この箇所を形而上学の冒頭と解するのか、あるいは、論理学に属すると解するのかにしたがって、形而上学が始まる箇所はずれてくることになる。ただ、いずれに帰属させるにしても、この哲学史的な言及箇所は、論理学の展開途中での「有限性あるいは反省の諸形式の考察において、その最高度の抽象として二つの純粋な非同一性すなわち自我と非我を考察しなければならない」 (Trox. 70) という叙述に対応したものということはできよう。
- (19) この箇所に、多田氏は「理性の弁証法」という見出しをつけている。
- (20) Vgl. Düsing, *op. cit.*, S. 175.
- (21) 「草稿」でも「揭示」でも、この思惟形式論にかんして特別のことはいわれていない。
- (22) もっとも、この部分についても〈私的講義〉がなされていたとしたら、〈舞台裏〉的発言が残されていた可能性はあろう。
- (23) 「ノート」の記述では、「論理学は、二つの部分、すなわち分析的な部分と総合的な部分に分かれる……」 (Trox. 63) となっているが、この言明が方法論上のものと解する理由については前掲拙稿「01/02年におけるヘーゲルの論理学構想について」125ページおよび139ページ註37を参照されたい。
- (24) ヘーゲルは『哲学史講義』のなかで「本質的に自己内においてあるという反省をともなった主観的なものとして立ち現れる」自己意識と存在するもの一般との対立という視座を提示した上で次のように指摘している。「関心の向かうところは、唯一この対立を和解させること、和解をそのもっとも高次の現存在において、すなわちもっとも抽象的な両端項において概念的に把握することなのである。この最高次の分裂は、思惟と存在というもっとも抽象的な対立であり、この和解が把握されなければならないのである。以降の〔近代の〕すべての哲学は、この統一に関心を示すのである。」G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, hrsg. von Eva Moldenhauer und Karl Markus, Frankfurt a.M. 1971, Bd. 20 (Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie III), S. 63 f.
- (25) Vgl. Düsing, *op. cit.*, S. 172 und Anm. 105.

(26)たとえば「時間は、連続性をともなった点として考えられなければならないし、空間もまた同様である。点は、時間においては自己の外に自己を定立しなければならず、そして一つの点は、他者へと移行してしまうことなしに、つねに連なっているというようにして連続的なのである」(Trox. 65)といった点の把握は、たんに反省の立場からの議論というよりも、実際には十分弁証法的な記述となっているといえよう。

(27) Vgl. Düsing, op. cit., S. 158.

(28) Hegel, Werke in zwanzig Bänden, Frankfurt a.M. 1970, Bd. 8 (Enzyklopädie I), § 24.

(29) なお、「草稿」には、論理学の実際の内容に先立って、有限な認識と無限な認識、悟性と理性等について触れられてはいるが、こうしたマテリア論についての言及はない。また、「草稿」にも“Materie”ということば自体は、理性的認識と有限な認識との関係が問題にされ、前者は後者を止揚するのであるといった脈絡のなかで「理性的認識において、あるいは哲学においてこうした有限な認識が“Materie”とな」(GW 5, S. 271)といったように登場はしてきているが、このMaterielは「素材」といった意味で使われていることは明らかである。

(30) こうした理解については、すでに引用した「要約」と注記された部分に出てくる次のヘーゲルの言明と照らし合わせればより鮮明になろう。「〔論理学における〕有限性あるいは反省の諸形式の考察において、われわれはその最高度の抽象として二つの純粋な非同一性、すなわち自我と非我を考察しなければならない。そこに至るまでは、われわれはマテリアを同一性と非同一性との無差別および両者の総合として定立した」(Trox. 70)

(31) R. シェーファーは、この「ノート」における定立と反定立の関係を「補完(Vervollständigung)」というタームで特徴づけている。Rainer Schäfer, Die Dialektik und ihre besonderen Formen in Hegels Logik. Entwicklungsgeschichtliche und systematische Untersuchungen. (Hegel-Studien. Beiheft 45) Hamburg 2001, S. 20.